

折 伏 要 文 (7)

法華講夏期講習会 第七期(平成18年7月8日)

皆さん、おはようございます。

法華講夏期講習会の第七期に当たりまして、皆様方には御参加、まことに御苦勞様でございます。

本年度は『折伏要文』について講義をしておりますが、なぜ『折伏要文』をテキストにしたのかと申しますと、御承知の通り、今、宗門は僧俗挙げて平成二十一年の「地涌倍増」と「大結集」に向けて前進をしております。この「地涌倍増」とは文字通り、法華講員を倍増していくことでありますが、それには当然、折伏が必要であり、折伏以外に増やす方法はないわけです。また「大結集」にしても、地涌倍増の伴わない大結集では名実共に達成したことにはなりません。結局、そこで大切なことは「地涌倍増」であり、折伏であるということになるわけであります。

折伏なくして地涌倍増はなく、地涌倍増の伴わない大結集も、これは単なる数集めにしか過ぎません。これでは御本尊様に対して、また御命題をくださった御隠尊日躰上人猊下に対しても、我々は面目が立たず、また御恩に報いることにもならないわけです。そこで何としてでも地涌倍増を達成し、そして大結集を果たしていくことが大事になるわけです。そういう意味から、本年度は折伏についてのお話をしているわけです。そこで皆さん方には、大聖人様の御書を拝しながら、折伏について学んでいただきたいと存ずる次第であります。

皆さん方も支部に帰ると指導教師をはじめ講頭さんや幹部の方々から「折伏をしなければ幸せになれないぞ」と言われるでしょう。けれども、それは我々が勝手に言っているのではなく、大聖人様がおっしゃっているのです。大聖人様は『曾谷殿御返事』の中で、

「法華経の敵を見ながら置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑ひなかるべし」(御書一〇四〇[㊦])

と、折伏しなければ師檀ともに無間地獄は間違いないとまでおっしゃっているのです。それにもかかわらず折伏をしないということは、自分自身の一生成仏も果たせないということになってしまうのです。我々はこのことを真剣に考えて、本年「決起の年」の残り六カ月において大折伏戦を展開して、そして勝利をしていただきたいと思う次第であります。

それではテキストの二十四ページを開いてください。そこに『曾谷殿御返事』の御文が二つありますが、今日はその二つ目の御文からになります。

曾谷殿御返事

「^{ほうぼう}謗法を責めずして成仏を願はゞ、火の中に水を求め、水の中に火を尋ぬるが如くなるべし。はかなしはかなし」(御書一〇四〇[㊦]二行目)

謗法を責めるといのは折伏をすることですから、ここに「謗法を責めずして」とあるのは、折伏

をしないで成仏を、幸せを願ってみても、それはまさに「火の中に水を求め、水の中に火を尋ねるが如くなるべし」と、大聖人様は、このようにはっきりとおっしゃっているわけです。

折伏をしなければ成仏しないということですが、その折伏においては「やれるときにやればいい」という考え方は間違いであります。そうすると我々のような煩惱充満の凡夫は「よし、明日からがんばるぞ」なんて言っても、翌日になるとまた「今日は忙しかったから、よし明日からやろう」というように、結局、いつまでもやらずに終わってしまいがちであります。ですから「やれるときにやる」などというのではだめなんです。

大聖人様の御書に『撰時抄』がありますが、これは「時を撰ぶ」という意味です。つまり仏様は、末法は撰受の時ではなく、折伏の時であるということをおっしゃっているのです。それこそ四六時中が折伏の時なのです。ですから「やれるときにやればいい」などという考え方は、これは絶対に間違いです。

我々が本已有善の上根上機の衆生ならまだしも、末法の本未有善の衆生であることを忘れてしまつては困ります。このことは皆さん方も自分の胸に手を当てれば、お判りだと思います。ですから、折伏は「やれるときにやる」のではなくして、いつでも下種結縁をしていく。この末法は四六時中が折伏の時なのだ、折伏を片時も忘れてはならないということでもあります。したがって、我々は謗法を責めずに成仏を願うのではなくして、折伏をして幸せになっていくのです。ですから、折伏をすべき時には、折伏をしていかなければならないということでもあります。

次が『種々御振舞御書』の御文であります。

種々御振舞御書

「各々思ひ切り給へ。此の身を法華經にかうるは石に金をかへ、糞に米をかうるなり(御書一〇五六、一七行目)

初めに「各々思ひ切り給へ」とありますが、この意味は、この御文の前後を拝読していくとよく解るのです。ですから、御書を易しく解釈しながらお話をしたいと思います。

まず大聖人様は「様々な難に遭うということは、初めから承知していたことである」と仰せられ、そこでこの後に例を挙げられています。すなわち、

「雪山童子は半偈のために鬼神に身を投げ与え、常啼菩薩は法を求めのために身を売り、善財童子は法を求めのために高い山から火の中に飛び込み、樂法梵土は仏の一語を書き残すために自ら身の皮を剥いで、それを紙として綴り、さらに薬王菩薩は臂を焼いて灯明とし、不軽菩薩は正法を説いて増上慢の者に杖木で打たれ、師子尊者は檀弥羅王に首を斬られ、提婆菩薩は法論に負けた外道の弟子に殺されてしまった」

ということです。そこで、

「このような様々な難は、どういう時に起こったのかと考えるに、天台大師や章安大師などの説を参考にしてみると、法華經自体は一つの法であるけれども、衆生の機根や、正法・像法・末法という時によって、その修行方法には様々な差別がある」

ということです。したがって釈尊は、

「我が滅後、正法・像法の二千年を過ぎて末法の始めに入ると、法華經の肝心である題目の五字を弘める人が出現するであろう」

と。つまり、末法の御本仏たる大聖人様が御出現あそばされるということです。そして、

「その時には悪い王様や悪い僧侶などが大地の土よりも数多くいて、それらの者が大乘や小乗をもって、この法華經の行者と競い合う」

ということです。しかるに、

「法華經の行者に折伏をもって責められるために、悪僧たちは在家の檀那などと示し合わせて、この法華經の行者に対して悪口を言ったり、あるいは杖木で打ったり、あるいは牢に入れたり、またあるいは所領を取り上げ、あるいは流罪にしたり、首を斬るなどと言って脅迫をする。それでも退転せずに強盛にこの正法を弘めていけば、今度は法華經の行者を迫害した者たちが、国主であればまず同士討ちを始め、国民であれば餓鬼のように互いにその身を喰い合い、そして後には他国から責められるであろう」

と。そして、

「これらは梵天・帝釈にちがつ・日月・四天等が、法華經の敵となる国を他国に責めさせているのである」と述べられます。したがって、

「各々日蓮の弟子と名乗る人々は、一人も臆する心を起こしてはならない」

と仰せられるのです。そこで、

「大難の時には、親や妻子のことを心配したり、所領を顧かえりみてはならない」

と、非常に厳しくおっしゃっています。さらに、

「無量劫の昔から今日まで、親や子のため、所領のために命を捨てた者は大地の土よりも多いが、法華經のためには未だ一度も命を捨てたことはない。過去世に法華經をずいぶんと修行した者は多いけれども、大難が起きた時には退転してしまった。それは譬えて言えば、せっかく湯を沸かしておきながらも水に入れてしまい、火を起こすのに途中で止めてしまうようなものである。それでは何にもならないではないか」

と仰せられます。そこで「各々思ひ切り給へ」、つまり、

「今度こそ各々覚悟を決めて修行をやり通しなさい。命を捨ててこの身を法華經に替えるのは、石を黄金と取り替え、糞あぐたを米に替えるがごとくである」

と、このようにおっしゃっているのです。

その後さらに、

「仏滅後二千二百二十余年が経った今日までに、迦葉かしょう・阿難等の小乗教の付法者や、あるいは馬鳴めみょうや竜樹りゅうじゆ等の権大乘の付法者、あるいは南岳・天台・妙楽・伝教等の法華經迹門の弘通者たちでさえも、未だに私通しなかったところの法華經の肝心、諸仏の眼目である妙法蓮華經の五字が、末法の始めに全世界に弘まっていくべき瑞相として、今、日蓮がその先駆けを切ったのである。我が一党の者たちよ、二陣三陣と自分に続いて大法を弘通し、迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にも越えなさい。わずかばかりの小島である日本国の主ぬしなどが威嚇するのを怖お

じ恐れるようであっては、閻魔王の責めを一体どうするつもりなのか。せつかく仏の使いと名乗りを上げておきながら、今さら臆するのは無下むげの人であると、このように申し伝えておくと、このようにおっしゃっているのです。

これは、たいへん厳しい御文であるけれども、我々が一生成仏をするためには、それだけの様々な難を乗り越えていかなければならないということです。しかし、たとえいかなる難が来ようとも、我々が南無妙法蓮華經と一途に信じて折伏を行じていけば、必ず結果は出てくるのです。ですから皆さん方は、そのところの自信を持って折伏に励んでいかなければならないということであり、

信心をして難に出会うと、このまま進んで行くと、たいへんなことになってしまうのではないかと思われるかもしれませんが、そうではないのです。必ず諸天善神が我々を守護してくださるのです。ただ、その中には闘いがありますから、それを乗り越えていかなければだめなのです。一步を踏み出す闘いをしていかないと、諸天善神が守ってくださらないのです。ここが肝心なんです。

この御文は短いけれども「各々思ひ切り給へ」、覚悟を決めて折伏を行じてご覧なさいと、このようにおっしゃっているのです。したがって、結果として必ず御本尊様の御照覧があるわけですから、勇気を持って折伏をしていくことが大事であります。

次が、

教行証御書

「日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず。彼々の経々と法華經と勝劣・浅深・成仏不成仏を判ぜん時、爾前迹門の釈尊なりとも物の数ならず。何に況んや其の以下の等覺の菩薩をや。まして權宗の者どもをや。法華經と申す大梵王の位にて、民とも下くだし鬼畜などと下しても、其の過あやまち有らんやと意得て宗論すべし」(御書一一〇九九六行目)

初めに「日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず」とありますが、この「臆病」ということは、自信がないから臆病になるのであって、御本尊様への絶対の確信があれば臆病にはならないのです。「御本尊様、諸天善神が必ず我々を守護したもう」との自信・確信があれば、誰も臆病にはならないのです。そこに「本当にこのままで大丈夫なのか」という疑いの心があると臆病になってしまうのです。ですから無む疑ぎ曰わっしん信、御本尊様への絶対の確信に立って折伏を行じていくということが大事なのです。

それから「彼々の経々と法華經と勝劣・浅深・成仏不成仏を判ぜん時、爾前迹門の釈尊なりとも物の数ならず」。この「彼々の経々」というのは法華經以前の経々のことです。その法華經以前の経々と法華經との勝劣や浅深、そして成仏・不成仏ということを判ずるときには、爾前迹門の釈尊でさえも物の数ではないと仰せです。

ここに「爾前迹門の釈尊」とありますが、教主釈尊という語には、六通りの解釈が存するのです。すなわち日寛上人が、

『『教主釈尊』の名は一代に通ずれども、其の体に六種の不同あり。謂わく、藏・通・別・迹・本・文底なり。名同体異の相伝、之これを思え。第六の文底の教主釈尊は即ち是れ蓮祖聖人なり」(御

書文段 二七〇(註)

と仰せのように、藏教の教主釈尊、それから通教の教主釈尊、そして別教の教主釈尊、さらに円教すなわち法華經に入ると、迹門の教主釈尊、本門の教主釈尊、最後に寿量文底の教主釈尊という、この六通りがあるわけです。ですから大聖人様がここでおっしゃっている「爾前迹門の釈尊」とは、この中の「寿量文底の教主釈尊」以外のことを指しているわけです。

したがって、大聖人様は我々に対して、弟子檀那として臆病であってはならないと仰せられ、その上でたとえ「爾前迹門の釈尊」であったとしても、それは「物の数ならず」と、このように確信を持って折伏をしていかなければいけないと御指南あそばされているのです。

「何に況んや其の以下の等覺の菩薩をや」。この「等覺」というのは、仏である妙覺の一つ下の位のことです。すなわち、大乘の菩薩の修行の位には、十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺という五十二位がありまして、等覺というは仏の位までは行かないけれども、仏の覺りに等しいことから「等覺」というのです。したがって、そういった位の高い菩薩であっても、恐れることはないとおっしゃっているのです。

「まして権宗の者どもをや」。これは、ましてや爾前権教の者たちを恐れてはならないということです。

「法華經と申す大梵王の位にて」。つまり、我々は法華經という最高の教え、王様である大梵王の位にいるのであるから、という意味です。

「民とも下し鬼畜などと下しても」。これは、たとえ権宗の者たちを鬼畜というように下したとしても、という意味です。これは相手の人格を否定したり貶すのではなく、相手の間違っただけの考え方に対しておっしゃっているのです。その間違っただけの考えに対して我々が臆病であってはならないわけです。「あなたの考え方は間違っていますよ」と言い切る自信を持って折伏をなささいということをおっしゃっているのです。

そこで「其の過ち有らんやと意得て宗論すべし」。彼らの過ちを正していく決意を持って宗論をしていかなければならないということです。つまり、間違っただけの権宗の者たちに対して、我々はしっかりと破折をしなければならぬということなのです。そのことをしっかりと考えて、自信を持って破折をしていくべきであるということをおっしゃっているのです。

大聖人様は『持妙法華問答抄』の中に、

「持つ処の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまされり。爰を以て經に云はく『能く是の經を持つ者は一切衆生の中に於て亦為れ第一なり』と説き給へり。大聖の金言疑ひなし」(御書 二九七(註))

と仰せられ、さらにその後、

「されば持たるゝ法だに第一ならば、持つ人随つて第一なるべし」(同 二九八(註))

と御教示あそばされているように、我々は一閻浮提第一の大御本尊を持っているのです。されば、持つ法が第一であるならば、その持つ人もまた第一なのです。普段の生活でも、また折伏をする時においても、そういう確信を持っていかなければだめなのです。このことを、大聖人様は法

華経を引かれて御教示あそばされているのです。

最高の教えを持つ我々は、一切衆生の中において第一の者であるということです。この自信がないと折伏がいい加減になってしまうのです。ですから「この信心をすれば必ず幸せになる」「大聖人様の仏法以外に幸せになる道はない」と、確信を持って言い切っていくことが大事なのです。

この自信は、勝手な自慢・高慢ではなく、仏様がおっしゃっていることなのです。ですから、我々はこれまで以上に自信を持って折伏をしていくことが大事なんですね。また、そうしなければならぬわけで、だから臆病であってはならないと、こういうことになるのです。このことをしっかりと覚えておいていただきたいと思います。

次が『兵衛志^{ひょうえのさかん}殿御返事』であります。この兵衛志殿というのは、池上兄弟の弟のほうで宗長の^{むねなが}ことです。この方への御返事です。

兵衛志殿御返事

「しをの^潮ひると^干みつと、月の^い出づると^入いと、夏と秋と、冬と春との^境さかひには必ず相違する事あり。凡夫の仏になる又かくのごとし。必ず三障四魔と申す障り^{さわ}いできたれば、賢者はよろこび、愚者は退くこれなり」(御書一一八四^ぎ一行目)

まさにこういうことですね。「しをのひるとみつと、月の出づるといと、夏と秋と、冬と春とのさかひには必ず相違する事あり」ということと同様に、我々が仏に成る時にもそういう相違があるということなのです。

そして「必ず三障四魔と申す障りいできたれば、賢者はよろこび、愚者は退くこれなり」。このときには三障四魔が必ず現れるのです。すなわち、

「行解^{ぎょうげ}既に勤めぬれば三障四魔^{さんしょうよんま}紛然として競ひ起こる」(御書 九八六^ぎ等)

とあるように、行解を勤めることによって三障四魔が紛然と競い起こるのです。ですから、何もやらない人のところには三障四魔も現れないのです。「お前なんか相手にしないよ」ということで、魔も相手にしてくれないのです。「私のところには三障四魔が競わないから、これ幸いだ」などと思っているようではだめなんですね。行解を勤めれば必ず三障四魔は起こってくるのです。この魔を打ち破るところに、また我々の信心^{けつじょう}決定と成仏という功德が待っているのです。

いつも言いますように、魔は仏様には絶対に勝てないのです。我々は、一閻浮提第一の御本尊を持っているが故に、一切衆生の中において第一なんです。ですから、我々の信仰が魔に負けることはないのです。

この「三障四魔」というのは、皆さん方もよくお判りのことだと思いますけれども、「三障」とは、煩惱障^{ぼんのう}・業障^{ごう}・報障という三つの障りのことです。

初めの「煩惱障」というのは、大聖人様が、

「煩惱障と申すは貪^{とん}・瞋^{じん}・癡^ち等によりて障碍^{しょうげしゅつたい}出来すべし」(同 九八六^ぎ)

と仰せのように、貪り^{むさぼ}、瞋り^{いかに}、愚かな^{おろ}考えといった三毒などの煩惱によって起こるところの様々な差し障りです。

二つ目の「業障」とは、これまでに犯してきた五逆罪や十悪などの悪業によって起きるところの様々な差し障りのことです。大聖人様が、

「業障と申すは妻子等によりて障碍出来すべし」(同)

と仰せのように、これは妻子などによって起こる障りです。例えば、奥さんや子供、あるいは身内^{みうち}の者が信心の邪魔をすることがあるのです。これはみんな業障なんです。ですから、信心強盛^{ごうじょう}に御題目をしっかりと唱えていかないと、この障りに負けてしまうのです。もちろん、我々は末法の衆生ですから、各々が過去からの様々な因縁による業をたくさん持っているけれども、その業に負けない強い信心をしていくことが大事なんです。そのためには朝夕の勤行^{ちようせき}を欠かさず、御題目をしっかりと唱えていくことです。そうすると、必ずそういう魔を退散させることができるのです。

それから三つ目の「報障」というのは、過去における正法誹謗などの悪業の報いとして受けるころの様々な障りであります。大聖人様が、

「報障と申すは国主・父母等によりて障碍出来すべし」(同)

と御教示のように、国主、父母、さらには社会的に権力を持つ者によって起きるのです。例えば、会社の社長さんから「信心をやめろ」などと言われることもあると思いますが、我々はそれを乗り越えていかなければならないのです。そのような時には、信心のすばらしさを実証として見せていくしかないのです。そこで社長さんと喧嘩^{けんか}をして「こんな会社は辞めてやる」などと言ってしまうのは、乱暴過ぎてだめなんです。「信心をするとこのように幸せ^{つか}を掴むことができます」ということを、やはり己^{おのれ}の信心の姿をもって示し、折伏をしていくことが大事なのです。

次に「三障四魔」の「四魔」について述べますと、これは煩惱魔・陰魔^{おんま}・死魔・天子魔という四つの魔のことであります。

初めの「煩惱魔」というのは、先ほど煩惱障のところでも述べたように、貪・瞋・癡などの様々な煩惱が仏道修行者の心を惑わして智慧を奪ってしまうというようなことです。

二つ目の「陰魔」は、「五陰魔」ともいいます。「五陰」というのは、色・受・想・行・識の五つでありまして、これは人間の身体や精神などを構成している五つの要素のことです。この五つの要素によって我々が構成されているのです。陰魔は、その五つの要素である色・受・想・行・識の調和を乱して、心の病や身の病などを引き起こし、仏道修行に障害をきたすのであります。

次に三つ目の「死魔」というのは、仏道修行者が死を迎えることによって修行ができなくなってしまう。あるいは身近な方が亡くなって、それが仏道修行の妨げになるというようなことです。

それから四つ目の「天子魔」というのは、欲界の他化自在天に住む第六天の魔王が、権力者などの身に入って仏道修行を妨害するというのであります。

このように、我々が信心していこうとすると、三障四魔という様々な魔が起きてくるのです。しかし、これを乗り越えるところに、我々は過去世の罪障を消滅して一生成仏を果たすことができるのです。先ほども言った通り、何もしなければ魔も相手にしてくれませんから、ひとつ「いつでも来い」という決意で臨んでいただきたいと思います。

これは私も聞いた話ですから試したことはありませんが、例えば犬に足を噛^かまれたとすると、た

いてい場合は噛まれると引いてしまうんですね。そうすると犬はもっと噛みついてくるそうです。けれども、そのときに足を犬の喉のほうに逆に突っ込むと、犬が驚いて放すそうです。まあ、これは話だけで、皆さん方はやらないでくださいよ。怪我をしても困りますからね。でも、そうらしいのです。

これと同様に、魔に対しても恐れて逃げるのではなくして、強盛な信心を持って魔に立ち向かって闘いを挑んでいくことです。そういう気持ちで精進していくことが大事なんですね。たとえ三障四魔が起こって来ても、これを敢然として打ち破っていくことが大切なのです。それにはやはり自行化他の信心ですから、題目を唱え、折伏をしていくことです。折伏を外したら信心は成り立ちませんから、自行だけの信心ではだめなんです。大聖人様は、

「末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり」(同一五九四)

とおっしゃっているんですね。

仏様は何のために末法の世に御出現せられたのかと言えば、それは多くの人を救うためです。仏様一人が納得して悟りを開くために御出現されたのではないのです。仏様は世界中の人を幸せにするために御出現あそばされたわけですから、仏様の御心はすべての人を折伏するところにあるのです。一閻浮提の一切衆生をことごとく折伏して、そしてこの仏法に帰依せしめるというのが仏様の慈悲なのです。

それを仏様の滅後、今、我々が仏様の使いとして行じているわけです。ですから、もしも「折伏なんかなくてもいいんだ」などというような考えを持っていたとするならば、それは仏様の御意に反するわけですから、これは功德がありません。したがって、我々は仏様の使いとして折伏をしていかなければならないのであります。

では、次にまいります。

妙法比丘尼御返事

「仏法の中には仏いまして云はく、法華經のかたきを見て世をはゞかり恐れて申さずば釈迦仏の御敵、いかなる智人善人なりとも必ず無間地獄に墮つべし」

これは非常に厳しい御指南でありますけれども、大聖人様は、折伏をしなければ無間地獄に墮ちてしまうぞとおっしゃっているのです。すなわち、大聖人様の仏法を非難中傷する謗法の者たちを見ても、折伏することを恐れて何もしない者は、それは仏様の敵であり、たとえそれが智人や善人であっても必ず無間地獄に墮ちるとおっしゃっているのです。

このところが判らないと、「あまり折伏をしなくてもいいのかな」といった具合に、そこそこに題目をあげて、そこそこにお寺に参詣し、そこそこに総本山に登山して、そこそこに御供養をして、何でもそこそこでいいのかと言うと、これは底の底になってしまうから底に行ってしまうんですね。やはり勇気を持って折伏に励むことが大事なのです。我々は、この御文をよくよく噛みしめていかなければなりません。

これは仏様が妙法比丘尼に対して、このように厳しくおっしゃっているわけですから、我々はよ

くよく拝していくべきであります。

「譬へば父母を人の殺さんとせんを子の身として父母にしらせず」

これは、例えば自分の父母を殺めようとしている者を見ていながら、何もしないのと同じであるということをおっしゃっているのです。だから折伏をしない人は、たとえ善人であろうと智人であろうと、それは無間地獄に墮ちるといふことでもあります。

また、

「王をあやまち奉らんとする人のあらむを、臣下の身として知りながら代をおそれて申さざらんがごとしなんと誡められて候」(御書一二六二ノ一七行目)

これは、王様を殺害しようとする人がいるにもかかわらず、家来がそれを知りながら、面倒になるのを恐れて何も知らせないのと同じであると誡められているのです。これはまさに不知恩ですね。これらの譬えと同様に、折伏をしないのは不知恩の者であり、そのような者は無間地獄に墮ちてしまうぞと誡められているのであります。

このことについて大聖人様は『阿仏房尼御前御返事』に、

「いふといはざるとの重罪免れ難し。云ひて罪のまぬかるべきを、見ながら聞きながら置いていましめざる事、眼耳の二徳忽ちに破れて大無慈悲なり。章安の云はく『慈無くして詐り親しむは即ち是彼が怨なり』等云云。重罪消滅しがたし」(御書 九〇六ノ)

と御教示あそばされています。つまり、折伏をせずに放置しておくようであつては過去世の罪障は消滅できませんよとおっしゃっているのです。「いふといはざるとの重罪免れ難し」。ですから、きちんと折伏をして、言うべきことを言わなければだめだということなんですね。「云ひて罪のまぬかるべきを、見ながら聞きながら置いていましめざる事、眼耳の二徳忽ちに破れて大無慈悲なり」。相手の不幸を見ていながら知らん顔をするのは、それは無慈悲であるということでもあります。

先ほども言いました通り、仏様は一切衆生を幸せにするために御出現あそばされたのです。我々もその仏様の使いとして、仏様がなされたように折伏をしていくというのが、仏様の弟子檀那としての務めなのです。ですから我々は、たとえ一文一句なりとも語って下種結縁をし、折伏をしていくということを忘れてはならないのです。

このように厳しくおっしゃっておられますけれども、それはまた逆も真なりで、このようにおっしゃることは、逆に折伏をすれば本当にすばらしい功德があるということでもあるのです。すなわち大聖人様は、

「罰を以て徳を惟ふに我が門人等は福過十号疑ひ無き者なり」(同 一一一五ノ)

ともおっしゃっているのです。つまり、折伏をしなければ無間地獄に墮ちるといふくらい厳しいけれども、それは逆に言えば、折伏をすれば「福十号に過ぐ」といふすばらしい功德があるということでもあるのです。ですから皆さん方には、この確信を持っていただきたいと思う次第であります。

次に、

法華初心成仏抄

「とてもかくても法華經を強ひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、謗ぜん者は毒鼓

の縁となつて仏になるべきなり。何にとしても仏の種は法華經より外になきなり」(御書一三一六
頁五行目)

我々は、とにかく折伏をしなければだめだということです。「やれるときにやる」というのではだめ
なんです。とにかく法華經を強いて説き聞かせていくということです。これは摂受ではなく折伏をし
なければだめなんです。

もし、そのときに「信ぜん人」、すなわち順縁の人がいれば、その人は仏に成りますよと。それ
から「謗ぜん者」、すなわち我々が折伏をすると反対する人。そのような人がいたとしても、その人
は「毒鼓の縁」となつて仏に成ると、このようにおっしゃっているのです。

この「毒鼓の縁」ということは、涅槃經の中に説かれています。すなわち、太鼓に毒薬を塗って、
それを大衆の中で打つと、聞こうとする心がなくても自然にそれを聞いて、その毒に当てられて皆
死んでしまうという譬えであります。つまり、そのときには正法を聞こうとしなくても、それを耳にした
ことによって、やがてその法を聞いたことが縁となつて成仏することができるということで、これを
「毒鼓の縁」とおっしゃっているのです。

ですから我々は、相手が聞こうが聞かまいが、相手が承知しようがしまいが、大聖人様の仏法を
強いて説き聞かすことが大事であり、そこで聞く心のある人は順縁によって仏に成り、また、たとえ
そのときに聞こうとしなくても、それが逆縁となつていずれ必ず成仏をすとおっしゃっておられる
のであります。

まさに一切衆生は、皆ことごとく仏性を持っているのです。しかし、いくら仏性を持っていたとし
ても、その仏性が絶対の仏界である御本尊様の縁に触れなければ、仏性は顕れて来ないので
す。

よく世間では「縁なき衆生は度し難し」と言いますが、たとえ仏性を持っていたとしても、その仏性が
仏性としての用きをするためには、我々が折伏をしなければだめなんです。所詮、本未有善の衆
生というのは、相手のほうから法を求めて来ることは稀です。これは皆さん方もそうではなかつたで
しょうか。中には順縁の方もいらっしゃると思いますけれども、たいていの人は、折伏をされて入信
したことと思います。ですから、今度は我々が説き聞かせるわけですから。そういうことが折伏につな
がっていくのです。そのときに相手が反対するかもしれない。けれども、それが縁となつていずれそ
の人は必ず成仏に導かれていくのです。

この大聖人様の教えというのは、本当にすごいのです。大聖人様の偉大なる功德によって、人
々がたとえ反対しても、それが縁となつて必ず成仏をしていくのです。ですから、皆さん方には自
信を持って折伏に励んでいただきたいと思ひます。

「何にとしても仏の種は法華經より外になきなり」。仏に成る種はこの法華經より外にはないので
すから、これを強いて説き聞かせていくことが大事であるということでもあります。

では、次に『寂日房御書』の御文にまいります。

寂日房御書

「かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華經を弘むべきな

り」

ここに「かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁しゆくえん深深ふかしと思ひて」とありますが、この宿縁が深いということは、その淵源えんげんをずっと遡さかのぼって尋ねていくと、結局、我々は久遠元初の仏様の弟子檀那となったということです。

先ほども言った通り、我々は一閻浮提第一いちえん ぶ だいの御本尊を持つ者であるが故に、一切衆生の中において第一なのです。久遠元初の昔に深い宿縁が結ばれたからこそ、この信心をする人たちは皆、尊いのです。御題目をしっかりと唱えていけば、どんなことでも乗り越えていくことができるわけですから、一人ひとりがそういう尊い宿縁があることを自覚して、胸を張ってこれからも折伏をしていただきたいと思います。

そこで「日蓮と同じく法華經を弘ひろむべきなり」とあるのは、大聖人様と同じように、この妙法蓮華經を弘めていきなさいということです。

要するに、御本仏大聖人様と宿縁が深いことを知って、そして大聖人様と同じように、いかなる大難あに遭おうとも、一歩も退かずにこの妙法流布のために精進していきなさいということであります。

「法華經の行者といはれぬる事不祥なり」

これは、いわゆる世間の目から見れば、命に及ぶような大難をはじめとする様々な難に遭ったり、また種々の迫害を受けるわけですから、そういったことを鑑かんがみると不祥であると仰せられているのです。また、

「まぬかれがたき身なり」

不祥の身であることは、もはや免れ難いことではあるけれども、しかし実際は違うということをおっしゃっているのです。

「彼のはんくわい・ちやうりやう・まさかど・すみともといはれたる者は、名ををしむ故に、はちを思ふ故に、ついに臆したることはなし」

これらは譬え話であります。

「彼のはんくわい・ちやうりやう」というのは、中国前漢の「樊噲」と「張良」の二人の武将のことであります。中国の歴史の中に「鴻門の会」というのがありますが、これは劉邦と項羽が鴻門という所で会いまして、この時に項羽ははんぞう范增の勧めによって劉邦を殺そうとするのです。この時に張良は樊噲を伴って戦ったことにより、劉邦は難を逃れることができたのです。要するに、この樊噲と張良の二人の武将は、一つの信念を持って戦ってきたということを言っているのです。

それから「まさかど」とあるのは、平将門のことで、この人は平安時代に反乱を起こした武将ですが、最後は滅びてしまうのです。

また「すみとも」というのは、藤原純友のことで、この人は平安中期に、西国で海賊討伐を命ぜられるのですが、後に自ら海賊を率いて朝廷に対して反乱を起こして、結局は攻め滅ばされてしまうのであります。

これらの者たちは「名ををしむ故に、はちを思ふ故に、ついに臆したることはなし」。つまり、臆

病ではなかったということを言っているのです。この是非についてはいろいろありますけれども、要するに最後まで信念を貫き通したということです。

「同じはずなれども今生のはぢはものゝかずならず。たゞ後生のはぢこそ大切なれ」

「今生のはぢ」というのは、世間の人から悪口を言われたり、物笑いにされるようなことです。しかし「後生のはぢ」というのは、これは現当二世にわたって自分自身の命の中に刻み続けられていくものなのです。したがって、今生のみで消えるわけではなくして、来世においてもこの恥は消えないということです。もしも、それが大聖人様の仏法に背いたものであるとするならば、それは自分自身の恥として末永く苦しまなければならないということです。

要するに、折伏をせずに悔いを残してはならないということです。それは「今生のはぢ」だけではなくして「後生のはぢ」になる。何であるときに勇気を出して折伏をしなかったんだらうと、悔いを残すぞということです。そうであってはならない、ということをおっしゃっているのです。

「獄卒だつえば・懸衣翁が三途の河のはたにて、いしやうをはがん時を思し食して法華経の道場へまいり給ふべし」

この「獄卒」というのは、地獄の番人のことであります。

それから「奪衣婆」は、三途の川の^{ほとり}辺にいまして、死んだ者が地獄に堕ちてくると、その者の衣服を身ぐる^はみ剥いでしまうのです。

そして「懸衣翁」というのは、やはり三途の川の辺にある衣領樹の上いまして、奪衣婆が身ぐるみ剥いだ衣服を木の枝にぶら下げて、その者の罪の軽重を決めると言われています。

要するに、そのような者に衣裳を剥がれる恥を思つて、折伏をしなかったという悔いを残すことがないように、信行に励んでいかなければならないということです。

「法華経は後生のはぢをかくす衣なり。経に云はく『裸者の衣を得たるが如し』云云」

この「裸者の衣を得たるが如し」というのは、法華経の『薬王品』の中に説かれています。『薬王品』には、この他にも、

「商人の^{しゅ}主を得たるが如く、子の母を得たるが如く、^{わたり}渡に船を得たるが如く云云」(法華経 五三五[〃])

というように、種々の譬えをもって法華経の功德について説かれているのです。その中の一つとして「裸者の衣を得たるが如し」の譬えを引かれているのです。

「此の御本尊こそ冥途のいしやうなれ。よくよく信じ給ふべし」(御書一三九四[〃]四行目)

そこで大聖人様は、この御本尊こそが冥途の恥を隠す衣裳であると、このようにおっしゃっているわけでありませう。

いずれにいたしましても、我々は勤行・唱題をして、そして折伏をすることです。この自行化他の信心をしていくことによって、我々は後生における恥を隠すことができるということでもあります。

今、宗門は御隠尊日顕上人猊下から戴いた平成二十一年の「地涌倍増」と「大結集」の御命題達成に向かって前進をしております。この時に、老若男女を問わず、すべての人が「地涌倍増」と「大結集」に参加をしていくことが大事なのです。そして、皆が揃って平成二十一年を迎えていき

たいと、このように思います。

今日の混沌こんとんとした世の中を見るに、我々は一日も早く多くの人たちに「大聖人様の仏法でなければ本当に幸せにはなれないんだ」ということを、折伏をもって伝えていかなければならないと思う次第であります。

皆さん方には、この『折伏要文』を毎日一項目でも結構ですから拝読をして、いかに折伏が大事であるかを肝に銘じていただき、折伏をしなければ本当に幸せにはなれないということをよく知っていただきたいと思います。そして、それを実行に移し、もって平成二十一年の大佳節には「地涌倍増」と「大結集」の御命題を名実共に成就してお迎えいただきたいと、このように思う次第であります。

それでは時間がまいりましたので、本日はこれをもって私の講義を終了いたします。